

2012年12月6日

シンポジウム：

国内外の農業開発に携わる人材の育成を考える

シンポジウム報告

国内外の農業開発に携わる人材の育成を考える - 「田舎で働き隊」の経験から -

開催日時： 2012年12月6日14:00~16:30

開催場所： アジア会館2階会議室

平成20年度農林水産省農村振興局の「田舎で働き隊！」事業の実施機関として選定されて以来、農村地域4か所で7回の農業実践研修に取り組みました。



➤ 第一部 現地報告

協会が実施する農村地域振興活動のパートナーである各地域社会組織の代表が「田舎で働き隊！」事業の成果、課題を報告しました。

さらに、遠野市で独自の活動に取り組まれている青年海外協力協会から事例報告をいただきました。

報告(1)「外部者が農村、農業を変える」
矢島亮一 (NPO 法人自然塾寺子屋理事長)

報告(2)「農業実践研修の経験から」
片倉和人 (NPO 法人農と人とくらし研究センター代表理事)

報告(3)「じょうえつ東京農大での研修」
藤本彰三 (株式会社じょうえつ東京農大代表取締役社長)



2012年12月6日

シンポジウム：

国内外の農業開発に携わる人材の育成を考える

報告(4)「利根・沼田地区の農業振興－地域に根付いて就農・定住するための導入期間の研修－」

中島基貴(雪国アグリ株式会社取締役)

活動紹介「ふるさと新生モデル事業－青年海外協力隊帰国隊員の挑戦－」

大塚正明(公益社団法人青年海外協力協会常務理事)



➤ 第二部 ディスカッション

司会： 板垣啓四郎(東京農業大学教授)
パネリスト： 矢島亮一(NPO 法人自然塾寺子屋理事長)
片倉和人(NPO 法人農と人とくらし研究センター代表理事)
藤本彰三(株式会社じょうえつ東京農大代表取締役社長)
中島基貴(雪国アグリ株式会社取締役)
大塚正明(公益社団法人青年海外協力協会常務理事)
新保隆彦(平成22年度農業研修生)

司会進行役として東京農業大学板垣教授をお迎えし、平成22年度「田舎で働き隊！」事業研修生(現在は民間企業で土産物食品の販売)の新保隆彦さんに新たにパネリストに加わっていただきました。

パネリストと参加者との間で意見交換を行いました。参加者には、青年海外協力隊員関係者、同OB・OG、民間企業と異なる分野から多くの方が参加しました。

ディスカッションは発表を踏まえての質問から始まり、議論が進むにつれより具体的な、また根本的な問題についての内容になっていき、「補助事業が故に受け入れ期間の制約があり、研修効果が現れるのは難しいのではないか」、「他省庁の類似事業との棲み分けをし、より効率的、効果的な事業を組み立てていく必要がある」など研修受入側から見た問題点などが聞かれました。また、研修員に目を向けた場合、「研修終了後の進路に不安があり、なかなか一歩を踏み出すことが難しい」、「就農を考えた場合、技術的な面を習得できたとしても、住居・販売先の確保などクリアしなければならない問題は少なくない」など、厳しい現実の声も聞かれました。さらに、青年海外協力隊帰国隊員の海外での経験と技術の活用について討論され、参加者や関係者の経験に基づく意見交換も行われました。

総括として議論は、新規参入の若者が農業を「職業」として継続できるかということに焦点が当てられ、新規参入から収入安定までの課題、今後は「交流促進」だけでなく「雇用促進」をさらに充実させていかなければならないという課題が確認されました。







2012年12月6日

シンポジウム：

国内外の農業開発に携わる人材の育成を考える

「田舎で働き隊！」の足跡

長野県岡谷市

| | |
|---|--|
| <取り組むべき課題> | |
| 耕作放棄地の有効利用、農村の伝統(農、食、暮らし)の継承 | |
| <課題背景> | |
| 岡谷市では、小規模経営の農家が多く、農業者の高齢化や後継者不足、鳥獣害の増加などが原因で遊休荒廃農地が年々増加している。こうした状況の中、自治会、農業婦人グループ連絡協議会、農産物直売所「岡谷市地域野菜生産消費振興組合」等の住民組織が地産地消や搾油用ひまわり栽培などに主体的に取り組む事例が見られるようになっている。 | |
| <研修期間> | |
| 平成 21 年 3 月(8 日間) | 平成 23 年 1 月～3 月(1.5 ヶ月間) |
| <実施主体> | |
| 海外農業開発協会 | |
| <受入地域の地域社会組織> | |
| NPO 法人 農と人と暮らし研究センター | |
| <研修内容> | |
| 地域資源調査、遊休農地の有効利用、耕作放棄地開墾 | 山羊の飼育管理、生活改善資料の管理(図書資料整理法)、区民農園直売所開設企画など |
| <研修人材> | |
| 男性6名 1)地元住民5名(半勤半農、61～64歳) 2)大学生(神奈川県、22歳) | 男性1名 IT 会社経営(茨城県、30歳) |
| <研修成果> | |
| <ul style="list-style-type: none">● 区民農園用地(約 180 坪)が開墾された。● 耕作放棄地の分布状況を示す地図が作成された。   | <ul style="list-style-type: none">● 区民農園用地の開墾(約 180 坪)● 県試験場で山羊の飼育法、去勢法、人工授精法を学んだ。● 生活改善アプローチをJICA研修員と共に学んだ。● 生活改善資料の管理システムを構築した。● 周辺施設を視察し、区民農園直売所建設を企画した。(→平成 24 年開設)   |
| <研修後の進路> | |
| 1. 区民農園活動に参加 2. 大学 | 茨城県で、NPO 活動を展開、ヤギのレンタル(除草、緑地管理)を提案した。 |

2012年12月6日

シンポジウム：

国内外の農業開発に携わる人材の育成を考える

「田舎で働き隊！」の足跡

群馬県甘楽町

| | | |
|---|---|---|
| ＜取り組むべき課題＞ | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ● 衰退する特産物生産とそれを取り巻く文化の継承 ● 養蚕・蒟蒻栽培を中心とした伝統的産業に代わる新たな営農モデルづくり ● 農村地域の活力をより高めるための地域農業の維持・発展 | | |
| ＜課題背景＞ | | |
| 富岡市周辺は典型的な中山間地域で、古くから養蚕、蒟蒻、椎茸などの生産・加工が盛んに行われ、それに伴う技術や文化が引き継がれてきた。しかし、近年の貿易自由化などの影響により、これら特産物に係わる産業が衰退し、地域農業構造が転換期を迎えている。こうした状況の中、グリーンツーリズムや少量多品目栽培など新たな地域づくりの試みが農業者活動組織を中心に進められている。 | | |
| ＜実施主体＞ | | |
| 海外農業開発協会 | 海外農業開発協会 | 甘楽富岡地域集落活性化協議会 |
| ＜受入地区の地域社会組織＞ | | |
| NPO 法人 自然塾寺子屋 | | |
| ＜研修期間＞ | | |
| 平成 21 年 3 月(8 日間) | 平成 23 年 1 月～3 月 (2 カ月間) | 平成 23 年 9 月～24 年 2 月 (6 カ月間) |
| ＜研修内容＞ | | |
| 地域特産物の生産とそれを取り巻く文化の継承、「地域資源ガイド」の作成 | 地元農家でイチゴとニラの施設栽培・収穫・調整・出荷、ハウスの補修維持管理 | 地元農家でのナス、ネギの露地栽培、インゲン、ニラの施設栽培、農業生産法人での稲収穫請負、行事・寄合に参加 |
| ＜研修人材＞ | | |
| 男性4名 1. JOCV 帰国者、26歳 2. 大学卒 求職中、23歳 3. 大学卒 JOCV 予定者、23歳 4. 専門学校卒 家業手伝い、20歳 | 男性1名 大学院生、24歳 | 男性1名 JOCV 帰国者、25歳 |
| ＜研修成果＞ | | |
| 地域特産物のこんにやく、ぱれいしょ、しいたけ、乾燥芋について理解し、生産に係わる基本情報を取り纏め「地域資源ガイド」を作成した。   | イチゴ・ニラ等の施設栽培研修を通して「少量多品目」経営の実態を解し、また、農家の苦勞、真の姿を垣間見ることができた。   | 各種野菜の収穫、調整・出荷、販売を実践し、地元の特産・地域資源を理解した。地元農家から伝統文化、風俗習慣、食文化、農業暦などを学んだ。食育に参加。   |
| ＜研修後の進路＞ | | |
| 1. 26歳 甘楽町で就農 2. 23歳 JOCV 参加希望 3. 23歳 JOCV 派遣 4. 20歳 家事手伝い、ボランティア | 食品関連会社(企画・開発・製造・販売・イベント開催)に就職 | 富岡市で就農 |

2012年12月6日

シンポジウム：

国内外の農業開発に携わる人材の育成を考える

「田舎で働き隊！」の足跡

群馬県沼田市

| |
|---|
| <取り組むべき課題> |
| 新規就農者の発掘や希望者の受け入れ、研修等を積極的に行い、野菜、果樹等の栽培から加工、販売までを体系的に研修・実践することで、同地域のみならず周辺地域の農業を担う後継者を育成する。 |
| <課題背景> |
| 沼田市は市全体の約8割が森林で、平成2年に全国で始めて「森林文化都市宣言」を制定した。気候は比較的降水量の少ない、夏冬・昼夜の寒暖の差の大きい内陸性気候で、リンゴ・ブドウ・レタス・ダイコン・ホウレンソウ・コンニャクイモ、コメ、乳用牛、豚などが生産されている。農家の高齢化、後継者不足によって脆弱化した農業経営・生産基盤の構造改革強化を図り、効率的かつ安定的な農業経営が営める農業構造の確立に向け、意欲と能力のある多様な担い手の育成・確保に取り組む必要がある。 |
| <実施主体> |
| 利根沼田集落活性化協議会 |
| <地域社会組織> |
| 雪国アグリ株式会社 |
| <研修期間> |
| 平成23年10月～24年2月(4.5ヵ月間) |
| <研修内容> |
| 農業の6次産業化を目指す民間企業活動のなかでのOJT。露地野菜の収穫、出荷調整。ゆずの集荷。東京の物産展に出展。地元小学校の食育活動に参加。野菜倶楽部の年次会合(作付計画、勉強会)に出席。 |
| <研修人材> |
| 男性1名 大学院修了、就農活動中(27才、神奈川県) |
| <研修成果> |
| <ul style="list-style-type: none">● 地域資源を有効活用した農業(特別栽培)を実践した。● ダイコン、ハクサイ、ホウレンソウの肥培管理、収穫、洗浄、出荷・調整の一連の体系を実践した。● 肥培管理、収穫後処理で使用する農業機械(根菜洗浄機、ビニールマルチ巻取り機、包装機等)の操作方法、維持管理方法を理解した。● 上記作物の経営分析を行い、高齢化、後継者不足集落での6次産業化の可能性を議論した。● 農家、地域社会組織と交流して集落の伝統文化、風俗習慣、食文化、農業暦を学んだ。 |
|  |
| <研修後の進路> |
| 本研修で将来の就農を決意し、神奈川県内で新たな研修を予定。 |





2012年12月6日

シンポジウム：

国内外の農業開発に携わる人材の育成を考える

「田舎で働き隊！」の足跡

新潟県上越市

| | | | |
|--|---|--|---|
| <取り組むべき課題> | | | |
| 中山間地農業の新たな担い手モデル構築 | | | |
| <課題背景> | | | |
| 上越市谷浜・桑取地区は典型的な中山間地で、農業の後継者不足のため高齢化が進み、限界集落も多く見られる。昭和30年代から県営開拓事業によって180ヘクタールの農地を造成してきたが、約30%が耕作放棄地となっている。こうした中、環境と健康にやさしく、かつ付加価値の高い中山間地農業を確立するため、当該地区農業者、産業界、東京農業大学、卒業生などの有志が出資して平成20年4月に株式会社じょうえつ東京農大が設立された。 | | | |
| <実施主体> | | | |
| 上越市西部中山間集落活性化協議会 | | | |
| <地域社会組織> | | | |
| 株式会社じょうえつ東京農大 | | | |
| <研修期間> | | | |
| 平成23年8月～24年2月(7ヵ月間) | | | |
| <研修内容> | | | |
| 生産実習(水稲、有機野菜)、販売実習(朝市、スーパー、インショップ)、加工実習(漬物、切り干し大根等)、地域行事への参加など | | | |
| <研修人材> | | | |
| 男性1名 大卒、就農活動中(25歳、東京都) | | | |
| <研修成果> | | | |
| <ul style="list-style-type: none">● 地域資源を有効活用した中山間地での有機農業を実践した。● イネ、ジャガイモ、カボチャ、ダイコン、ズッキーニなどの作物において、栽培、加工、販売まで一連の体系を実践した。● それら加工食品の販売手法、市場動向、市場開拓を実践した。● 稲作、野菜栽培で使用する農業機械の運転方法、維持管理方法を習得した。● 実習内容について経営分析を行い、有機農業の実施可能性に取り組んだ。● 実践研修全体を通じて、農産物とそれら加工食品の生産拡大(B級品の利用含む)を図る方策について学んだ。● 地元農家から集落の伝統文化、風俗習慣、食文化、農業暦を学び、交流を深めた。 | | | |
|  |  |  |  |
| <研修後の進路> | | | |
| 研修受入れ先農場で研修を継続 | | | |